

光芒

白石すみほ

関東地方で豪雨が続き鬼怒川の堤防が決壊した。濁流が家押し流し、かろうじて屋根に逃れた夫婦が犬を一匹ずつしっかりと抱き、ヘリコプターで救助された。

春子は愛犬ドンの頭をなでながらテレビを観ていた。ドンは十四歳、柴犬とセパードのミックス中型老犬で、人間なら七十二歳である。自分ならどうするだろう。災害時に何も持たず、ドンのみしっかりと抱いて脱出できるだろうか。

ドンを飼うきっかけは十四年前。職場恋愛が破綻して自死以外に何も考えられなくなった頃に沈んだ心を引き摺って河口の方へふわふわ歩いていたら、小さな水溜りで溺れかけている子犬に出会った。まだ目も見えず痩せて濡れそばつて必死に手足を動かしている。春子は幼時に噛まれたことがあり犬が嫌いだった。それなのに抱き上げずにはいられない。わずか洗面器一パイ程の水溜りで足掻いている子犬と、河口に嵌って自死する自分が重なった。カーデイガンで子犬をくるみ大急ぎで一人暮しのアパートへ戻った。バスタブでいねいに洗いドライヤーで乾かした後に、人肌にくくめた牛乳をなめさせた。その夜春子は男と睦み合

ったベッドで子犬を抱いて寝た。死は消えていた。

男とは不倫の関係だった。両親の争いばかり見て育った春子に結婚願望はない。九州の大学に入った時点で一人暮らしを始めてからは叔父の葬儀に帰省しただけで、家族の縁は切れていた。親も春子に何かを求めてくることはない。男は孤独な春子と都合よく遊んだ。しかもその春入社した二十歳の女子と懇ろになる。若い肉体に溺れたのだ。春子とてまだ三十五歳なのに、男は見えるはずもない老いの影を春子に感じたようだ。これから先忍び寄る老いに抗って生きていくだけの信念もなかった。ならいつそのこと、まだ若さが残っている内に死にたい、と錯乱した。

春子はドんに救われ、ともに齢を重ねて五十歳になった。日曜日。最近めつきり弱ったドんに「留守番たのむわね」と声をかけて、スーパーマーケットに向う。近頃の天気は気まぐれだ。洗濯物は部屋干しで出かけてきた。

犬はヒトより約五倍早く歯石がつき易く歯周病にもなる。獣医に言われてドンの歯を磨いている。歯が弱いと食べられない。最初は嫌がったドンが今では安心して身を委ねる。犬用の歯ブラシも進化して「山切りカット」の超極細毛が犬の奥歯まで磨ける。一本九百円。犬用グッズはヒトの物より高額なのだ。その歯ブラシ五本とドンの好物（魚や鶏の缶詰）とスナック状のフードを二袋、春子の食材を買い込んだら、一万円札が消えた。給料日まであと一週間。

買物用リュックを背負ったまま扉を開けると、ドンがよたよたと近づいてきた。「ごめんね、遅くなって。どうしたの？ お腹すいた？」ドンの顔をぐりぐりなでて首を抱きしめたら「ウォーン」と切なげに啼いた。どうやら散歩に出かけたらしい。夕方四時をまわっていた。「わかったわ、ちよつと待つてね。ひと休みしてから連れて行くから」春子はインスタントコーヒー、ドンには牛乳をコップ半分皿に入れてやる。十分休んでリードをつけた。

川沿いの土手を散歩する。空模様が怪しい。部活の生徒が一行になって走っている。ドンは川原へ降りる石段の方へリードを引っ張る。リードをはずすと、土手に沿って歩いて行く。いつもの散歩コースではない。川向こうの集落へ渡る橋が見える。鳴り物入りのペーロン舟が男子のかけ声とともに橋をくぐり抜け、川面をすべって行く。気がつくくとドンの姿がない。あわてて見渡すと、土手をえぐった半円の中に水難除けの地藏を祀る鄙びた祠があり、その前にうづくまっていた。曼珠沙華の紅色が胸を射る。

獣医の話の思い出した。「そろそろですか。運動不足のせいで体重も増え過ぎて心臓にも負担がきとる。足も弱つとるし、白内障だし、あとどの位生きていられるか？」ドンは死期が近いのを覚って春子を連れ出したのだろうか。獣医はPR紙を見せながらこうも言った。「犬専用の介護施設に入れたら、寿命も延びるかもしれない。食事や運

動の面倒はきちんとみてくれるし、獣医は二十四時間常駐し運動用のプールもある。ドンのトラウマになっている水嫌いもケアしてくれるでしょう。月額二十万円からだんだんにありますよ」春子は戦いた。ヒトの特別養護老人ホームの入居料をはるかに上回る。自分の老後の行方さえ定かではないのに。ドンは春子の心を読んだのだ。

ドンの傍に屈んで首のあたりを両手でそつと摩った。ドンは春子を見上げクウーンと声を放つて立ち上がり、土手の切れ目から祠の裏側にまわった。そこには工事用の盛り土があり、なぜか半径五十センチほどの奥深い穴があった。けだるそうにウオオーンと啼き体をかがめて穴の中に入ると、前足に頭を乗せて蹲る。春子は悄然と立っていた。

大粒の雨が音を立てて落ちて来たかと思うと雷鳴が轟き稲妻が光った。思わず耳を塞ぎ目をつむってしゃがみこむ。ずぶ濡れなのに、まるで修行の滝に打たれているようで心地よい。ドンに終の棲家を与えられない自分がなさけない。雨足になぶられることで、愛犬を守れない愚かさを洗い流したかった。どのくらいそうしていたらうか。いつの間にか雨は止んでいた。盛り土の上から流れ落ちた土が穴を塞いだ。静まった夕闇の中に饅頭墓がぼつかりと浮かんでいる。ふと西の空を見上げると、天に召された魂がゆらめきながら、天使の梯子を上昇していく様が見えた。